

讃岐の丘から国際医療の発信と共有を ～発展途上国に対する医療について考える～

代表者 森田 幸子 (医学部医学科3年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、以下①及び②を目的としている。

- ①途上国での医療に関わりたいと考えている学生が、将来自分との関わり方についてビジョンを持ち、そのための知識を習得すること。
- ②学生だけでなく地域の人にも国際医療についての重要性を発信し、関わりを持ってもらう。この目的を達成するために、シンポジウム、イベントの開催を行う。

2. 実施期間（実施日）

平成20年6月10日 から 平成21年3月31日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業には、以下の二つの企画がある。

- ①先生を招いてのシンポジウム開催
- ②学園祭・学外等でのイベント開催

①先生を招いてのシンポジウム開催

プロジェクトがスタートしてから、3回のシンポジウムを開催することができた。

第1回「災害時における緊急援助について」

日本国際医療センター 国際協力課 課長 仲佐 保先生

途上国で災害が起こったとき、日本の緊急援助隊はどのようにして現地へ行き、現地で活動しているのかをグループでシミュレーションしてもらい、帰国までのプロセスについて学べるものであった。

18人の参加者の中の6名は学外の学生であった。
国際支援に興味はあるが、自身の学校では学ぶ機会



第1回シンポジウム

がないという学生にとってこのような機会は非常に貴重だという意見をいただいた。

人数は少ないが、今まで機会がなくなった学生が国際支援に関われるきっかけを作ることができ、価値のあるものになったと思う。

第2回「災害医療」

HuMA（非営利活動法人 災害人道医療支援会）理事、東亜大学医療工学部 准教授

中田 敬司先生

日本を含め、災害が起こる前の危機意識の持ち方、防災方法、災害が起こったときに必要な知識を学べるものであった。

その後、先生が実際に行われていたインドネシア沖地震、ミャンマーサイクロン時の緊急援助隊の活動のお話をお聞きした。



第2回シンポジウム

時間の関係でグループワークができなかったのが残念だったが、先生の話が非常に楽しかったので、参加者には満足してもらえた。

国際医療のみならず、防災・自助という観点についても改めて考え直すことのできる機会になったと思う。

第3回「医療保険制度」

香川大学 医学部 医療管理学 平尾先生

日本の医療保険制度から、他先進国の保険制度、途上国の保険制度についてのシンポジウムであった。

保険制度は一体どのような仕組みで成り立っているのかを学び、途上国で保険制度が成り立たない理由を学んだ。

国際医療において、必要なのは医療だけでなく、医療を行う上で必要なお金という現実的な問題について学べるものであった。

参加者からは、国際支援は医療従事者だけでない、さまざまな機関、専門家等が集まり行われることが理解できた、という声をいただいた。

これら3回のシンポジウムを通じて、国際医療・国際支援とはどういったものなのか、ということに参加者に理解してもらい、その重要性を認識してもらえる機会になったと思う。また、国際支援だけでなく、日本の状況を比較して学ぶことで、日本の医療制度についても興味を持ってもらえるものであったと思われる。

②学園・学外での発表

<学園祭>

今回はコーヒーというツールを活用して、途上国のコーヒー農家が抱える貧困の問題と私たち先進国の生活が密接に繋がっていることを知ってもらうイベントを開催した。

経済問題が絡み合っているため、非常に難しい問題ではあったが、劇・クイズ等を取り入れ、できる限り分かりやすく説明するように努力した。

また、今回は「コーヒー」という問題を訴えたが実際に伝えたかったことは、先進国の豊かな生活が途上国の貧しい生活に繋がっているという事実を知ってもらうことであった。その点を考慮してはいたが、「コーヒー」がメインになってしまい、本当の目的が薄れてしまったことが反省点として考えられる。

参加者は、学生、保護者、学外の方々等さまざまな方に参加してもらえた。

学外の参加者からは、こんな事態が起こっていることは聞いたことはあったが、まったく別の世界のことだと思っていた。健康に関することでもあるので、これからもこのように医大生によって、イベントを開催し啓発活動をしていってほしいという意見等をいただけた。

学外の方にも興味を持ってもらえたことが一番大きな収穫だった。

<学外でのイベント>

香川県内の高校、中学校、小学校で出張講座の開催を企画している。

現在

・災害医療 ・HIV/AIDS ・貧困 ・母子保健

をテーマにした出張講座ができるように、マニュアルの作成を行った。

今後、学校側からテーマを選んでもらい、出張講座を行っていく予定である。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

今回これらのイベントを通して、実際に行動に移し、国際医療に関わるイベントに自発的に参加する学生も現れた。

今まで、考えもしなかった途上国の問題を、参加者の方々には新たなテーマとして考えてもらえるようになったという点で影響を与えられたと思う。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響

①先生をお呼びしてのシンポジウム開催

3回のシンポジウムでは、各会に担当者を振り分けた。

担当者はリーダーとなり、先生との連絡、広報、当日の進行等の業務を行った。

その業務の中で、リーダーシップ能力、マネジメント能力がどういったものであるかということが分かった。

今後様々な場面で、これらの能力を発揮していかなければならないが、この経験を通して、発揮する自信が少なからずついたのではないかと思われる。

②学園祭でのイベント開催

今回ステージのテーマをメンバーで「コーヒーと貧困」に決め、イベントを開催した。各自様々な手段を使って調査し発表内容を勉強した。

普段勉強しない経済といったテーマも勉強することができ、新たな知識をつけることができたと思う。

準備するにあたり、メンバーと何度もミーティングを重ね、話し合いをおこなった。

時にはぶつかり合ったりもしたが、お互い励ましあい、協力して一つの目的に向かって努力した時間は貴重なものであった。

今回参加したメンバーは、国際医療に興味を持つ人たちが増えることを望んでいたメンバーばかりである。

毎回のイベントを通して参加者が増し、国際医療に興味を持つ学生が増えることを実感できたことは、大変有意義なものであった。

<学園祭の準備風景>



6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

「テーマ選び」に関して、反省点がある。

まず、各イベントにおけるテーマ選びは、国際医療という軸をもとに、自分たちが伝えたいことを選んだ。これが、各イベントに来てくれた方々とのニーズに沿っていたかという点、必ずしもそうとはいえなかった。

今回の各イベントでアンケートを取り、皆が知りたいと考えているテーマを知ることができたので、今後はこれらのアンケートをもとに、テーマを選んでいきたいと考えている。

また今後は、学外での活動をメインに考えている。現在までに行えた活動は、主に学内に向けてのものが中心であった。今後小学校から高校、いずれかへ行き、国際医療に関する勉強会の開催を計画している。このときは今までの反省を踏まえ、いくつか可能なテーマを用意し、満足してもらえる勉強会を開催していきたい。

最後に、今回このような機会を与えてくださってありがとうございました。

このプロジェクトで得た経験が無駄にしないよう、今後引き続き活動を行い、役立てていきたいと思っております。

本当にありがとうございました。

7. 実施メンバー

代表者 森田 幸子 (医学部3年)

構成員 石岡 千奈 (医学部3年)

黒田 絢子 (医学部3年)

鈴木 泉 (医学部3年)

長 たまき (医学部3年)

細田 愛 (医学部3年)